

神の恵をゆめなわすれそ

牧師 山本 護



「さかゆく御代に うまれしも おもえば神の めぐみなり いざや児等 神の恵をゆめなわすれそ ゆめなわすれそ ゆめなわすれそ 時の間も」という小学唱歌を、知っているでしょうか。この唱歌「さかゆく御代に」を学校でうたった人は、もう世にはいないでしょう。旋律はクリスマスの讃美歌 111 番「神の御子は今宵しも」で、1880 年(明治 13 年)、最初の唱歌が編まれた時に選曲されています。

文部官僚の伊沢修二は米国東部に留学し、音楽教育の重要性を感じて帰国後、省内に「音楽取調掛」を作ります。伊沢は、留学先の師であった M.メーソンを外国人教師として日本に招き、彼と共に小学校で教える唱歌を編纂しました。メーソンの存在は大きく、原曲はほとんどが米英の伝承歌か讃美歌。原曲の歌詞をまず直訳してみて、伊沢や取調掛員らが内容を検討改変し、覚えやすい七五調の日本語に整えて唱歌にしていきました。

クリスマスの讃美歌「神の御子は今宵しも」は元来、「Adeste Fideles」というラテン語の聖歌。国民の情操を育む唱歌の由来がキリスト教では、と文部省内に警戒感もあったようですが、明治 10 年代は教育行政がまだ手探り状態で、「さかゆく御代に」は礼拝でも使えるほど原意を残しています。ところが明治も 20 年代に入ると、教育勅語の強制が進み尊皇愛国が徹底されて、「さかゆく御代に」はうたわれなくなりました。

現在、日本基督教団のほとんどの教会では「讃美歌 21」を用いていますが、八ヶ岳伝道所では古めかしい文語調の旧来讃美歌を使っています。その理由は、なんと言えいいか、歌に力を感じるからです。旧来の讃美歌、たとえば「神の御子は今宵しも」には「賤の女」という差別語があり、また「御稜威(みいつ)」とか「高御座(たかみくら)」といった天皇性用語を神讃美のために用いている。加えて、讃美歌の原曲が欧米のものに偏重している、という問題なども承知しています。しかしそれでも歌の力を選びたい。

明治初期、築地の居留地にいた宣教師の手紙に、「日本の子女が涙で頬をぬらしつつ讃美歌をうたう」という記述が見られます。この讃美歌の威力、あまりに情報過多な現代において、古めかしく懐かしい力、故郷の力として私たちの頬をぬらすのではないのでしょうか。まもなくクリスマス、「さかゆく御代に」の元歌もうたいます。Ω